

2020. 3. 8 第二主日礼拝

ヨハネ 11:32-45 「ラザロの復活」

聖書

32 マリアはイエスがおられるところに来た。そしてイエスを見ると、足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」

33 イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。そして、霊に憤りを覚え、心を騒がせて、

34 「彼をどこに置きましたか」と言われた。彼らはイエスに「主よ、来てご覧ください」と言った。

35 イエスは涙を流された。

36 ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。どんなにラザロを愛しておられたことか。」

37 しかし、彼らのうちのある者たちは、「見えない人の目を開けたこの方も、ラザロが死なないようにすることはできなかつたのか」と言った。

38 イエスは再び心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓は洞穴で、石が置かれてふさがれていた。

39 イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだラザロの姉妹マルタは言った。「主よ、もう臭くなっています。四日になりますから。」

40 イエスは彼女に言われた。「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか。」

41 そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて言われた。「父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します。

42 あなたはいつでもわたしの願いを聞いてくださると、わたしは知っていましたが、周りにいる人たちのために、こう申し上げました。あなたがわたしを遣わされたことを、彼らが信じるようになるために。」

43 そう言ってから、イエスは大声で叫ばれた。「ラザロよ、出て来なさい。」

44 すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたまま出て来た。彼の

顔は布で包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」

45 マリアのところに来ていて、イエスがなされたことを見たユダヤ人の多くが、イエスを信じた。

はじめに

先週からイエスさまの最後の一週間に思いを向けています。今日の聖書箇所は「ラザロの復活」として知られている所で、この出来事は受難週より前になりますが、ラザロの死と復活を通して、イエスさまはご自分の十字架の死と復活を予告され、さらには永遠のいのちを与える力を持っておられることを示されたのです。本日の説教の前に渡邊正美兄の追憶の時を持ちました。2020年1月10日に69歳で主の御許に召されました。追憶の中で述べましたように、イエスさまを愛した忠実な祈りの器でした。突然の地上でのお別れはとても悲しいですが、今永遠のいのちを与えられ、全き平安の中にイエスさまと共におられることを感謝します。渡邊兄は死にました。しかし、死は終わりではありません。死は復活の始まりです。やがて主にあつて眠った者はみな甦らされ、永遠に主と共に生きるのです。地上に残された私たちは、先に召された聖徒たちとの再会を信じ、今日も与えられた道を歩むのです。さて、ラザロの復活はどのようにしてなされたのでしょうか。

1. 愛する者が病むこと

愛する者が病むということはとても辛いことです。何とかして病が直るよう祈り、手を尽くすでしょう。ベタニヤにラザロという人がいました。彼にはマリアとマルタという姉妹がいました。彼女たちのことはルカ 10:38～42に出て来ますが、ラザロに関してはどのような人物かわかりません。ただわかることは、イエスさまが二人の姉妹とラザロを愛しておられたということです(5節)。姉妹たちはイエスさまに使いを送り、ラザロが病んでいることを伝えました。これを聞かれたイエスさまは「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。」(4節)で言われ、ラザロの病気は

死を意味する病であったことがわかります。愛する者が死ぬほどの病で苦しんでいるとわかれば、すぐにでも行きたいと思うでしょう。それが人の常ですが、イエスさまは違う対応をされました。「ラザロが病んでいると聞いてからも、そのときいた場所に2日とどまられた」のです(6節)。

一刻を争う場面でなぜイエスさまは動かせないのか？ 困っているときに助けてくれるのがイエスさまではないのか？ この場面を想像するときに、色々な疑問が沸いてきます。そしてその疑問は、今日の私たちの疑問であるのかもしれませんが。“主よ。どうして助けてくださらないのですか。早く来てください”と主の助けを今必要としている方がいることでしょう。なのに、主は動かせないとすれば、そこにはどんな意味があるのでしょうか。

2. 神の栄光の現れ

イエスさまはご自分の力を現されるとき、私たちには不可解な対応をなさることがあります。イエスさまがベタニヤに行かれたとき、ラザロはすでに墓に納められ、死後4日経っていました(17節)。“万事休す”です。ラザロの姉妹マルタとマリアは、二人とも同じように「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」(21, 32節)と言っています。

私たちにとって万事休すの状態は、絶望以外のなにものでもありません。イエスさまがおられるのになぜこんなことになるのかと、イエスさまに不信を募らせる原因にもなりかねません。ところがイエスさまは「あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます」(15節)と言われ、ラザロの死の場面に自分がいなかったことを喜ぶかのような言い方をされました。愛する者が死に、家族が悲しんでいるのに、まるで人ごとのような冷たいことばに聞こえます。しかし、イエスさまの心は誰よりも悲しみでいっぱいでした。実際イエスさまは、ラザロの死を前にしたとき「涙を流し」(35節)、人々の悲しむ姿とご自分に対する人々の失望を見られたとき、「憤り」(33, 38節)を覚えておられますから、決して人の痛みを無視して喜んでおられるのではありません。むしろ悲しむ者に深い同情を

寄せ、涙を流し、死という現実に無力な人間の姿に強く感情を揺さぶられているのです。

墓は洞穴で、入口は石で塞がれていました。イエスさまは「その石を取りのけなさい。」(39 節)と言われましたが、姉妹マルタは「主よ、もう臭くなっています。4 日になりますから」と。イエスさまは彼女に「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか。」(40 節)と強い口調で言われたのです。人々が石を取りのけると、イエスさまは父なる神に祈りをささげた後、「ラザロよ。出て来なさい」(43 節)とラザロを復活させたのです。

ラザロの復活がすべての者に明らかになるために、ラザロの死が必要でした。それはイエスさまの十字架の死と復活にも当てはまることで、死なくして復活はあり得ないことを私たちに教えるものです。イエスさまはラザロの死と復活、そしてご自分の十字架の死と復活を通して、「神の栄光」(4, 40 節)を現そうとなさったのです。人にとって死という絶望こそが、復活の道につながる希望の入り口になるのです。それゆえにクリスチャンの死は、地上でのお別れという悲しみを抱えつつも、ただ悲しみに暮れるのではなく、復活の入り口に立つ者として、悲しみを希望に変えることができるのです。もし今、目の前に困難や絶望を抱えている方がおられましたら、困難や絶望を希望に変えることができる復活のイエスさまに目を向けようではありませんか。

3. 信仰の応答

私たち信仰者は困難な状況に陥れば陥るほど、忘れてはいけないことがあります。それは、あなたが「信じるなら」(40 節)という言葉です。このことばは私たちに信仰のチャレンジを促すものとなります。イエスさまは私たちにご自分の偉大な力を現し、ご自分が今も生きて働いておられる真の神であることを証したく願っておられます。そのイエスさまの力を引き出すために、私たちの信仰が必要なのです。私たちが「信じるなら」、事は成就します。しかし、信じなければ何も起こりません。

私たちは困難な状況を前にすると、おじけづいてしまい、頭では信仰の応

答をしなければいけないとわかっているにもかかわらず一歩が踏み出せないことが多くあります。イエスさまは、踏み出せない私たちのことを良くご存知ですから、私たちが神さまを信じて歩んでいけるように、ラザロの復活を目の当たりに経験させていただいたのです。イエスさまはラザロの復活を通して、“わたしは、死者をもよみがえらせる力をもっていること。そして父なる神から遣わされた者であり、その方の御心を行うために来た”ことを人々の前に証されたのです(4, 40 節)。このような偉大な証をもっておられるイエスさまが、今日私たちと共におられることを信じましょう。イエスさまを私たちの生涯の中に迎えるなら、すなわち「信じるなら」、神さまの大きな栄光が現されると約束しておられるのです。私たちの前には次から次へと問題課題が押し寄せてきます。将来の課題は、そのときにイエスさまに委ねれば良いので、今日の前の課題に対して、ラザロをよみがえらせたイエスさまと共におられ、神さまの栄光がどのように現されるのかを期待しようではありませんか。願わくは、抱えている課題に神さまの栄光の現れとしての一筋の光が見えますように祈ります。

まとめ

ラザロとその家族におそいかかった突然の病と死、それはあたかも私たちの毎日が自分の思い通りにはいかないことを物語っているようです。問題課題に翻弄される私たちがいたとしても、そこに復活のイエスさまと共におられることを見失わない者でありたいと思います。ラザロをよみがえらせた主は、ご自身もよみがえり今も生きて私たちと共におられます。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」(ヨハネ 11:25, 26)。この問いに対して、“はい。信じます”と告白して今週の歩みに踏み出しましょう。祝福を祈ります。